

夏休み企画「ガラスの小皿をつくろう」～内灘町親子ガラスワークショップ～

団体名●佐藤ゼミナール3年／代表者名●米田希美（人間科学部こども学科3年）

はじめに(背景・目的・目標)

R6能登半島地震で被災した内灘町の小学生とその保護者を対象に、内灘町教育委員会の協力の下、ガラスのワークショップを企画・運営しました。震災から2年が経ち、少しずつ日常を取り戻しつつありますが、未だ雑多な用事に追われ文化的活動を楽しむ余裕がない方も多いのではないかと思います。このワークショップを通して、モノづくりの楽しみが心の癒しへと繋がり、子どもたちにとっても夏休みの良い思い出になればとの思いから企画しました。

当日は、参加者の方たちがスムーズに活動に取り組めるよう、教材・材料の準備と分かりやすい説明を心がけました。また、こども学科としての得意を活かし、作りたい作品が安全に作れるよう、子どもたちへのサポートに力を入れました。

活動内容

ワークショップは、1日目(8/2)、2日目(8/23)の2日間に分けて開催しました。参加者数は23名でした。あらかじめ準備する材料の都合上、20名の募集を予定していましたが、30名近くの応募者が集まったため抽選を行い、当初の定員より多くの親子が参加しました。開催場所は、両日とも内灘町文化会館で実施しました。

ワークショップ1日目は、参加者がオリジナルのガラスの小皿を制作しました。参加者は用意された耐火石膏型に模様を彫りこみ、好きな色のガラスを詰めます。模様を彫りこむために使用するニードルは、先が鋭利で子どもが取り扱う際に注意が必要なため、安全面に配慮しました。その後、できた上がった型を一度大学に持ち帰り、電気炉で焼成しガラスを溶かしてお皿の形にしました。



ワークショップ1日目の様子 ガラスの型に模様を彫る親子

2日目、出来上がったガラスの皿に主菓子を盛り付け、私たちが点てた抹茶と一緒に楽しんでもらいました。完成したガラスの小皿を他の参加者や親子で鑑賞し合い、良い交流活動が生まれました。



点て出しの抹茶と、完成したガラスの皿に主菓子を盛り付けた様子

成果、結果の考察

参加者を対象に行った事後アンケートでは「出来上がった作品が焼く前より色が濃くなったり、色同士が混ざり合ったりして意外性があった面白かった」などの意見が寄せられ、ガラスの焼成前と焼成後の変化を楽しんだ方が多くいました。また、「子どもと一緒に楽しみながら活動することができてよかった」との意見もあり、親子で楽しみながら活動に参加できた方が多く見受けられました。このことから、本活動のねらいが達成でき、私たちも充実感を得ることが出来ました。

親子参加型でアートを通じたコミュニケーションが生まれるような企画内容を組み立てた点や、事前準備や会場設営に力を入れ、難易度の高いガラスのワークショップであっても子どもたちが安全に楽しく活動できるよう手厚い支援を行った点が、これらアンケート結果に見られる好意的な意見に反映されていたと考えます。

今後の課題、展望

活動後に「親子同士の交流を促すため、こちらからの過剰なコミュニケーションは敢えて控えた」と話す学生もいました。今回のワークショップは、将来、教育者を目指す私たちにとって、状況に応じたこどもへの支援方法を実践的に学ぶ良い機会になったと思います。「今後も使えるものだから、今回の活動を思い出しながら日常で使うことができるのが楽しみだ」「カトラリーやボウルなど、他の物も作ってみたい」というアンケートの回答もあり、形として残せることや日常で使えることに楽しさを見出した参加者も多く見られました。

一方、思い通りの作品にならず心残りがある参加者も見られたので、次回はより事前説明等の内容をわかりやすくし、全ての参加者が満足できるよう、より良いワークショップを企画・運営できるようにしたいです。